
天秤 薬局

かっぱ同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天秤 薬局

【Nコード】

N0278Y

【作者名】

かつば同盟

【あらすじ】

天上界の天秤薬局で、見習い星薬師として働くメイ。師匠のレイデンと共に、天上界の不治の病“銀河病”に対抗できる薬の研究に励んでいる。病気の人魚、カリスマの双子、特撮ヒーロー俳優、ヒトデ女など、天秤薬局に訪れる個性豊かな星守の民との交流をベースに、見えてくる天上界の社会性、宗教性、歴史などを追っていく。

第一星の登場人物

《天秤薬局 第一星登場人物》

少々ネタバレになります。人物の確認にご活用下さい。

シャラバトマ・メイ

- ・星薬師見習い
- ・レイデンの弟子

> i 3 3 7 9 1 — 1 3 6 5 <

セミロングの髪にリボン（またはカチューシャ）をつけている。天
上界の老舗薬局“天秤薬局”の見習い星薬師。基本的に敬語だが、
いつも一言多い。レイデンを過度に老人扱いし、彼の後は自分がこ
の“天秤薬局”を継ぐと明言している。大賢者の称号を持っていた
偉大な魔女シャラバトマ・ルイの娘で、星の魔力を受け止める星杯
が極端に大きいらしい。（要するに魔力が大きい）レイデンいわく、
「容量が大きくても中に入っているデータがクズ」（才能はあつて
もまだ職人として技がなっていないと言う意味）
おしゃべりでハキハキと物申す分、無口で無愛想なレイデンと違っ
て商売上手。

レイデン

- ・星薬師（天秤薬局店長）
- ・88賢者の一人（天秤座）
- ・メイの師匠

> i 3 3 7 9 2 — 1 3 6 5 <

深くフードをかぶって、いつもは顔が見えないが、実際は金髪の美青年（しかし高齢）。誰も克服できなかった銀河病の進行抑制剤を初めて作った人物で、その功績がたたえられ賢者となった。口が悪く無愛想だが、銀河病患者に対しては熱心で、銀河病に打ち勝つ薬を作る事に長年を費やして来た。もともと弟子を取るつもりは無かったが、メイの才能に一縷の希望を抱き、彼女を弟子に取った。星の魔力を受けとめる星杯はメイ程大きくないが、精錬された技術と経験、努力、なにより銀河病の特効薬を作ることへの執着心によって偉大な星薬師となった。

妻子は居らず、“輝き遅れ大三角形”の一人に数えられている。（偉大な人物なのに結婚できなかった三人のうち一人と言う意味）

セリア

- ・魚座宮の宮姫

> i 3 3 7 9 3 — 1 3 6 5 <

長く青い髪の美女。かつて、星皇室の妃候補の大本命と言われていた誉れ高き姫宮。しかし、銀河病が発症し妃候補のレースから脱落した。宮主の父の期待に添えなかった事、誰からも見放され、一人暗い部屋で隔離された事に傷ついていたが、レイデンやメイの存在に少しずつ癒されていく。

Dr. ブレーメル

- ・ 88 賢者の一人（蛇使い座）
- ・ 星医師

> i 3 3 7 9 4 — 1 3 6 5 <

ルイの弟で、メイの叔父にあたる。蛇使い座にある総合病院の院長であり、賢者の称号を持つ医者である（ルイ亡き後、継ぐ形で賢者選ばれた）。レイデンより上の世代だが、見た目はだいぶ差がある。本人いわく、家庭を持つと老けるもの。

ルイが死んだ時、銀河病になってからでは遅いと考え、どうしたら銀河病にならないかを研究している。病院に何人も弟子を持っているが、末の息子であり弟子のバジヤードを助手としてよく連れている。

バジヤード

- ・ Dr・ブレイメルの息子で弟子
- ・ 星医師

> i 3 3 7 9 5 — 1 3 6 5 <

若くしてすでに蛇使い座の病院の星医師である。Dr・ブレイメルの息子だが、常に師匠として接している。メイとは従兄妹。大きな力を持っていながらそれを持て余すメイの事が気に入らず、昔から良く衝突していた。星医師としてのプロ意識が高く、一人の患者に固執せず全体を見る事が出来る。少しひねくれたところがあるが、医者としての才能はあり、レイデンにも認められている。

香弥^{かや}

- ・ 双子座宮の若宮
- ・ 紫衣と双子で、兄

黒髪で端正な少年。メイと同期。

紫衣^{しゐ}

- ・ 双子座宮の姫宮
- ・ 香弥と双子で、妹

黒髪的美少女。メイと同期で、親友と言える仲。

牛飼いさん

- ・ 牛飼い座の牛飼い
- ・ 酪農家。

ごつい。よく農薬を買いにくる。親ばかりで愛妻家。

メリディーン夫人

- ・ さそり座の富豪、メリディーン家の奥様

痩せていて背が高い。夫の浮気が許せず、最近病んできている。

役人さん

・王都ノーザンクロスの役人

天パのたれ目。レイデンのところに助けを求めに来た。常にテンパリぎみ。腰が低い。白鳥の引き車に乗っている。
レイデンに“星クズ”と言われる。

オルガム

・宮廷星薬師長

長髪で面長。レイデンの事をライバル視している宮廷星薬師。沢山の弟子を抱える。

シャラバトマ・ルイ

・かつての大賢者（蛇使い座）
・偉大な魔女
・メイの母

メイの母で、偉大な魔女。三人しかいない大賢者の一人だった。銀河病で既に亡くなっている。

1：星の底の人魚姫

天上界は今日も通常運転。星の宮の恵みはいつも通り。

星守^{ほしもり}の民は変わらず毎晩、“星の宮”に星火を灯す。それが彼らの存在理由であり、義務である。

何一つ変わらない星の配列、その光を守る事で、得る輝きのエネルギーを営みに役立てる。

何一つ変わらない。変えてはいけない。
それは、星の宮の意志。

> i 3 3 7 9 6 — 1 3 6 5 <

第一星　　く人魚姫と銀河病く

魚座宮は豊かな雲中海の中にある。ガラスと白い大理石と水晶で骨組み、貝殻と泡の化石が贅沢にあしらわれた、88宮の中でも特

に歴史深く美しいとされる天上界遺産の一つである。

そんな宮殿の一番奥の部屋に、表向きのキラキラしい美しさとは真逆に薄暗く、音の無い深海のような部屋があった。

その部屋では、病に伏せた姫が一人、ひっそりと療養している。名を“セリア”と言う。

彼女の病はこの天上界の最たる恐れ、“ぎんがびょう銀河病”である。

「いいか“しもべ”ども。ぎんがびょう銀河病の進行抑制剤だ。しんこうよくせいざい心得ろ」

天上界の老舗“天秤薬局”の星薬師であり、賢者の称号を持つレイデンの声だ。

彼は右の中指からぶら下がる天秤の皿を、左手で持つ杖でこんこん叩きながら、薬の調剤を行っていた。

いつもは悪戯ばかりするポイズンポプリのピクシーたちも、彼には従順である。

彼の天秤の上でピクシーたちは踊り、歌い、やがて薬となる。

ところが、隣でポイズンポプリのピクシー錬成を行う彼の弟子は、その作業にほとほと手間取っていた。なにしろ“銀河病”の進行抑制剤は複雑な調剤と多種のポプリを必要とする。

しかもピクシーの鮮度が命で薬も長持ちしない為、患者の診察時に作り処方する事が義務づけられている。いくらレイデンが凄腕の星薬師でも、簡単なピクシー抽出くらいは弟子に任せ、同時進行で薬を作る方が幾分楽である。

しかし、レイデンの弟子“シャラバトマ・メイ”は、ピクシーたち

を作り上げるこの初歩作業ですらなかなか上手くない、見習い星薬師であつた。

ピクシーを作り上げるやいなや、ピクシーたちはメイの邪魔ばかりして、レイデンがフードの隙間から厳しく睨みをきかせない限り、部屋をうろついたりしている。

「おいメイ、足りないぞ」

「わ、分かってますって師匠。でもしもべたちが…」

「言い訳するな。しもべにコケにされるお前が悪い」

「……………」

メイは視線を横に流す。

「全くこれだから年寄りは。自分が未熟だった時の事なんてこれっぽっちも覚えてないんだから。生まれた時から一流だったとでも（云々）」

メイは彼女自身の天秤の上に特別な星水を足して、ぶつぶつ言いながらポプリをふやかしもどしている。

レイデンとメイの目の前では、大きなバスタブレットの薬湯に浸かったセリアが、二人の調剤をもの珍し気に覗くのが習慣だ。

「ふふ、難しそうね」

「そうなんですよね。師匠くらいビクになるとしもべたちが自分からついていくんですけどね、こいつら一応、星の宮の精霊です

から基本的に人より格上って思ってるところがあつて。はあ、正直手で握りつぶしたくなるっていうか」

「あ、ほら、メイさんのフードにも一匹」

「え？ あ、いた、いたたたた！！」

メイはフードから顔にあい上がってきたしもべを引きはがそうとした。

レイデンは深くかぶったフードの隙間から、その様子を淡々と流し見て、短いため息をつくど、自分の杖で大理石の床を打った。

カン、か、キンの間くらいの鋭い音が部屋に響いた瞬間、そこらで好き勝手していたピクシーたちが硬直し、恐る恐るレイデンを見るのである。

「いい加減にしないか、しもべの分際で。また日干しにされたいのか」

この一言が決め手である。ピクシーたちは慌ててレイデンの元集って、列を作り、自分たちが薬として調剤されるのを待つのである。メイは呆氣にとられ、ばつの悪そうな顔で自分の作業に戻る。セリアはクスクス笑っている。

「流石ですわねレイデン師。ふふ、なんて滑稽な。ピクシーたちもこれでは悪戯できませんね」

「……………」

「それでも師匠は割としもべに甘い方ですよ！！ アメと鞭が上手

いっていつんですか？ 私はとてもこいつらに優しくなれそうにない……」

「メイ……おしゃべりがすぎるぞ」

そろそろ調剤の終盤と言う時、自分の作業もままならないのに余計な事は言いたくなるメイだ。
いよいよレイデンの声音が低くなる。

メイが冷や汗ながらに作業に集中する様を見て、またセリアは愉快そうにしている。

しかしセリアは一通り笑った後、いきなり現実を目を向ける。何か
にハツとした様に。
自分の体中にある、黒と白の斑点のような痣を無視する事は出来ない。

それはまるで銀河のようである。

「……レイデン師、私は後どれくらい生きていられますか……？」

「……………」

レイデンもメイも、その言葉に顔をしかめた。しもべたちはクスクス笑っている。

「……気弱な事を申されますな。あなたらしくもない」

「そ、そうですね！！ 病につけ込まれますよ」

レイデンは出来上がった薬を天秤から薬杯に流し込み、メイに渡した。メイはそれに星水を注ぎ、急いでセリアのところへ持っていた。

「セリア様、どうぞ」

「……………」

セリアはきまりの悪そうな微笑で、それを受け取る。

「……………ありがとう」

そしていつもの様に、この薬を飲む。

かつて、ノーザンクロスの子皇室に嫁ぐ、妃候補の大本命と言われていた魚座のセリア。

その美しかった面影はあれど、銀河病に病んだ痛々しさは素直に見て取れる。

メイは、彼女の視線を追った。何も無いはずの場所を見つめている。きっとそれは、迫り来る暗い闇。

“死”だ。

銀河病は星の宮の意志。それを治す事も暴く事もかなわない。

星の光が地上に降り注ぐ限り、星守の民にとって銀河病は恐れでなくはならないと。

それこそが星の通常運転。

明日もあさつても、繰り返し“同じ”である事を、運命づけられた天上界の星守の民。

これは、明日もあさつても、何一つ変わらない毎日の為に、“何か”を変えようとした星薬師の少女の物語。

2：天秤薬局のお客様

大きな爆発音が、今まさに天秤座の端のオアシスで響いた。ここは老舗の天秤薬局である。

その衝撃で周囲の樹に並んどまっていた鳥たちが、騒がしく飛び去っていく。

「ゲホッ…ガホッ…」

爆発でカウンターを真つ黒にした見習い星薬師のメイが、かがんでいた体勢を戻す。

「まったくもお…何で出来ないのよ!!」

カウンターの上では、真つ黒な暗黒物質がたくさんピクシーたちに囲まれて、いままさに調剤されたところだ。

「あーあまた失敗だね」

「だね、ダークマターだね」

ピクシーたちは口々に噂し、くすくす笑っている。

「才能が無いね」

「やーいへたくそー」

「ざまああああ」

口々に悪口を言うピクシーたちにいらついたメイは、そのピクシーたちに掴み掛かって握りつぶそうとする。

店の端で天上新聞を読んでいた店長のレイデンが、そのフードの間からメイたちの様子を見て、短いため息をつく。

「また失敗か。しもべたちを無駄殺しまくるから恨まれてるんだな」

「!？」

メイはレイデンに突っ込まれ、しばらくつも掴み取っているピクシーたちを解放した。

「だって師匠、こいつら生意気ですもん」

「メデイカルピクシーなんてそんなもんだ。それをちゃんと使いこなせるのが一流の星薬師つてもんだろ。その声をちゃんと聞いてやれば、自ずと応えてくれる」

「……………」

「とにかく、お前の創り出したその悲しい暗黒物質を埋葬しろ。このしもべ殺しが」

レイデンの言葉に、メイが何にも言えないでいる。するとピクシーたちは調子良く口々に「そーだこのしもべ殺しー」とか、「手厚く弔えばかやるー」とか、甲高い声でわめき出す。その声がまた、たまらなく耳に痛い。

そんな時、誰もいなかった薬局に今日の第一訪問者が現れた。メイは慌ててその失敗作、もとい暗黒物質を足下のバケツに放り込む。営業スマイルに切り替え「いらっしやいませー」と、客に愛想よく挨拶する。

しもべたちが「あ、おいこら」とか「てめー扱い酷いぞ」とか口々に言っているけど、そこら辺は無視した。

本日のお客様一組目“双子座の若宮と姫宮”

見目麗しい双子の香弥^{かや}と紫衣^{しい}。メイに取っては幼なじみ二人である。

「腰痛に効く薬はあるか」

「え？ 腰痛？」

「ええ、父が昨日立ち上がるときくしゃみをして、それで…」

「ああ…ぎっくりフラグってやつですねえ…。ねえ師匠、覚えがありますよねえ、ねえ師匠」

メイはしつこく、向こう側のレイデンに問う。レイデンは何も答えない。

「…まあ、そう言う事だ。昨日は大事な座会の途中だったと言うのに父上と来たら、ねえ紫衣さん」

「ええ香弥さん。代わりに香弥さんが仕切って下さったからよかったものを」

「……………」

メイはカウンターの後ろの無数の棚から、腰痛の薬を取り出した。

本日のお客様五人目“牛飼いさん”

酪農や牧畜が産業として有名な牛飼い座の牛飼い。

「あれ、牛飼いさんまたですか」

「どうにもこうにも、星草病ほしぐさびょうの予防になる農薬が無くなってね。あれのせいで、そこら中の草が真っ黒だ。牛たちは普通に食べて、何の影響も無さそうなのに…。星草病の草を食べている牛の乳製品は危ないとか、そこら中で噂してやがるから、こちとら商売上がったりだぜ。やっと落ち着いて来たけど…」

「……………今農家や酪農家は大変ですよねえ。星草病は昔からある、ただ草が変色するだけの大した事無い病気なのに。むしろ牛たちにとつてはおいしいらしいですよ、星草病の牧草つて。真っ黒つてのがイメージ的に良くないんでしょうね。ピンクとかだったら良かったのかな？　ねえ師匠」

メイはレイデンに投げかけた。レイデンは積み上げられた本の中から顔を出し、

「星草病は定期的に巡ってくる天上界の現象だ。こんなに大騒ぎする事じゃないのに、全く…」

何やら文句を言っている。

本日のお客様十人目“さそり座のメリディーン夫人”

「夫の浮気を治す薬をくださいまし」

「いや…そんな薬は……」

「浮気を予防し、今後一切しなくなるしたくなる薬をくださいまし」

「ちょ…ふ、夫人…落ち着いて下さい」

血走った眼で、ドレスのフリルを震わせる夫人のあまりの怖さに気圧されるメイ。

夫人は横目でレイデンを見る。

「いいえ、レイデン師なら出来るはずですね。そうでしょう」

「……………出来ない事も無いが、男としても尊厳とプライドを粉々にぶちこわすえげつない薬だぞ。そんな事してまでメリディーン卿の浮気性を治すくらいなら、奴との関係を考え直した方が気も楽だぞ」

「レイデン師！！お助け下さい！！」

午後のお客のいない時間に、薬局にいきなり駆け込んで来たのは王都ノーザンクロスの役人であった。天秤の皿を磨いていたメイは、もの珍しそうに役人を見る。王都ノーザンクロスには大きな薬局もあるし、宮廷星薬師もいるので、そうそう王都の人間がここまで来る事は無いのだ。

「あれ、めっずらしいですねえ、役人さんがこんなところまで来るなんて」

「シャラバトマ・メイ！！ レイデン殿は！？」

涙目でカウンターに身を乗り出す役人に若干引き気味の、メイは、隅のレイデンに視線を送った。
レイデンはむすつとしている。

「王都の人間が何のようだ」

「レ、レイデン殿おおおお！！ 偉大な星薬師であるあなた様に、私の一生のお願いが！！！」

「いいから用件を言え！！ 簡潔にだ！！」

「は、はい」

役人は何がそんなに大変なのか、カウンターに乗り上げ土下座気味

で、事情を説明し始める。

「実は、夜の儀式で“星の宮”に星火を灯すペガサス部隊が、どこから持って来たのか新型星インフルエンザに感染してしまつて。ええ、ほぼ全滅と言つて良いでしょう！！ このままでは夜の儀式での点灯が不可能となつてしまいます！！どうか、あなた様のお力をお借りしたく、わたくしめが参上つかまつたと言う訳です！！」

「なにがお力をお借りしたいだ。王都の星薬師どもで何とかしろよ」

レイデンは読んでいた本をパタンと閉じた。

役人はそれでもカウンターから降りない。

「それが新型星インフルですので、新たな薬の調剤に戸惑っているのです！！ もうお手上げなんです！！ このままでは、私の責任問題で星の宮に裁かれ、下手したら“星クス”にされます」

「良いじゃねーか、星クス野郎」

「良くないです！！」

役人はいよいよ号泣の域に入り、カウンターの上でピクシーにすらドン引きされている始末。メイはいよいよ気の毒と言うか、面倒くさくなり、レイデンの様子を伺う。

「師匠…どうします？ まあ王都の星薬師は商売敵で手を貸したくない気持ちは分かりますが…」

「……………」

レイデンは腕を組んだまま何かを考えているようだったが、役人のわめき声にしびれを切らし、立ち上がると杖を手に取った。

「ええい、うるさいうるさい。王都の星薬師も役人も、いつもこいつも使えない星クスばかり」

「レイデン殿！？ やって下さるのですか！？」

「うるさい、調子に乗るな。それが星の宮の意志なら仕方の無い事だ。儀式は我々星守の民に課せられた義務の様なもの。それが滞り無く行われるのに手を貸さなかったら、俺までもが裁かれてしまう」

「レ、レイデン殿おおおお」

役人はいまだカウンターの上で、何度も頭を下げていた。

「あの、いいかげんそこから降りてくれますか？」

メイはあきれ顔である。

しかしそれ以上に、師匠が彼ら王都の人間に手を貸す事に驚く。

「良いんですか、師匠」

「何が」

「だってノーザンクロスに行くんですよ。いくら夜の儀式に関する事情って言ったって、師匠が手を貸す言われは無いのでは？ 師匠には銀河病の患者だっている訳ですし」

「確かに」

レイデンはフードの中からメイを見おろした。

「しかし、ペガサス部隊は天上界に無くてはならない存在である事は事実。どんな病気であれ、苦しんでいるなら早く治してやるにこした事は無い。王都の星薬師は気に食わないが、患者に優劣があつてはならない。そして、病にもだ」

「……………」

「分かつたらさつさと準備しろ。ポイズンポプリは出来るだけ上質な物を」

「は、はい」

メイは慌てて、レイデンの言葉通りに動き出した。

準備をしながらも、繰り返しその“言葉”を気にしながら、やはり師匠は天上界にとって賢者となるだけある存在なのだと思います。

何かしらの一大事になる時、こういった“賢者”の偉大さにしびれたりするのだ。

3：宮廷病院にて

王都ノーザンクロスは、この88星座に区分された天上界の地域を約50星座まとめる都だ。

白鳥を家紋とする星皇室が存在し、政治の中心となっている。配下についている星座はそれぞれの宮主を中心に独自の政治体系を持っているが、星座間の行き来は自由で、空には常に星間タクシーが行き交っている。

レイデンとメイは、役人の乗って来た白鳥の引き車に乗り込み、今まさに王都に辿り着こうとしていた。

天秤座はそれほど田舎ではないが、ノーザンクロスに比べたら大した事は無い。それほどに王都は栄えている。

真っ白で砂糖細工のような巨大なキグナス城を中心に、近代的なオフィス街や、老舗の店舗の並ぶ商店街、星の宮の最高教司のいるポラリス寺院が存在し、政治の中心として機能する全てが揃っている。

白鳥の馬車はキグナス城についた。

城は一般人も入れる下層、政治の役所となる中層、星皇室のある上層に分けられ、てっぺんには白鳥座の星の宮が存在する。

この星の宮が天上界で最も強い光を持っている。（ただし宗教上もとても重要な星の宮は、ポラリス寺院の真上にある）

「レイデン師、こちらです」

役人は慌ただしく、宮廷病院の一室へ案内した。宮廷の医師や星薬師は、レイデンを見るや否や慌てた様にかしこまる。レイデンは彼

らにとって、それほどに権威のある存在だ。

しかし、レイデンはこの星薬師が嫌いだった。星薬師と言うよりは、ここの星薬師長が。

「おや、頑固なレイデン師がこちらにいらしてくれとは。田舎にすっこんで決して王都にはこられないと思っていたのに」

「相変わらずのひがみ様だな、オルガム。お前たちの無能さを無視できなかっただけの話だ」

長髪で面長の宮廷星薬師オルガム。彼はレイデンと同期だが、同じ星薬師として何かと比べられることからレイデンを妬み、こうやって会う度に嫌味を言ってくるのだ。

メイはそんな二人をまずまずな瞳で見上げ、肩をすくめる。そんなメイの肩に、ポンと手が乗せられた。

「まあまあ、そこら辺にして。今はそれどころではないだろう。新型インフルエンザは天上界全体の一大事。しかもペガサス部隊を今夜の儀式に送り出さなければならぬ。一分一秒と無駄に出来ないのだよ」

「……………ブレーメル」

「あ、ブレーメル叔父さん」

メイの肩に手を置いた、頭にターバンを巻いたこの男、Dr・ブレーメル。彼は自分の弟子合図して、レイデンにカルテを渡させた。Dr・ブレーメルは蛇使い座の賢者であり、星医師として名高い人物である。そして彼は、メイの叔父でもあるのだ。

「やあメイ、元気かい？」

「叔父さん…いえ、Dr. ブレーメルもお元気そうで」

「世間話は全てが終わってからにしよう。レイデン、すぐにでもカルテに目を通してもらえるかい。新型インフルエンザは前代の物と違って土星の輪苔が効かない」

レイデンはメイからポイズンポプリの入った籠を受け取ると、流される様に調剤所へ足を向ける。メイは慌ててついていこうとしたが、

「お前は来なくていい」

レイデンにあっさり止められた。

「な、何ですか!？」

「お前、俺に恥をかかせるつもりか。俺の弟子がお前みたいな“無能”だとバレたら、オルガムに何言われるか」

「……………」

メイは額に汗をため、特に何も言い返せない。

側で会話を小耳に聞いたブレーメルの弟子が、プツと吹き出す。

「お前はここの銀河病患者の様子を確認しておけ……」

「ああ、それならバジヤードもメイと一緒にそちらへ行ってもらおうかな。人数と、進行状況、衛生面など、確認しておいてくれ」

「……………えっ」

Dr・ブレイメルの弟子、バジヤードは瞳を大きくさせ、あからさまに嫌そうにした。

レイデン、Dr・ブレイメル、オルガムはそれぞれ専門的な意見を述べあいながら、こちらそっちのけで調剤所へ向かっている。

「……………」

「……………」

残されたメイとバジヤードは一時立ちぼうけていたが、やがてお互いチラ見して、大きいため息をつくのである。

「…さつき、私の事笑いましたよね」

「笑ったけど、何か？」

「失礼だと思いませんか？」

メイはわざとらしい笑顔でバジヤードに問う。

「いや、レイデン師の言葉は最もだと思ってな」

バジヤードは今までのすまし顔を、急に意地悪く変え、メイに対して高圧的になった。

「気の毒ながらに笑ってしまったよ。賢者の弟子ともあろう者がお前のようにダメダメだと立場も無いだろうよ。オルガム殿はああ見

えて、弟子の育成には力を注いでいる。ここ宮廷星薬師のほとんどは彼に師事していると言っても良い。それなのにレイデン師唯一の弟子のお前がこのようにちんちくりんでは……………ねえ」

散々な言われ様だがメイも負けはしない。彼女は前のめりになって、ニヤリと笑う。

「相変わらずの猫かぶりですねえ。こんなひねくれ者だとは誰も思っていないせんよバジヤード。あなたの言いたい事はよく分かりましたが、そんな嫌みつたらしさで星医師なんて勤まるんですかねえ。あーあーブレイメル叔父様の息子さんだとは思えないわ。道理で？ 星医師というおいしい物件でありながら？ なかなか浮いた話を聞かないんだわ」納得」

「……………うつせえバカ、医者は晩婚が多いんだよ。つ。てか俺はまだ若い！！　ってかそれはお前にだって言える事だろうが！！」

「で、でも私ほら？ 師匠って言うでつかい目の上のたんこぶがついてきますけど？ っていう…。おじいちゃんも一緒だけど良いですか？ っていうのはなかなかハードルが高いよなあ。って」

「お前全部レイデン師のせいにしてんじゃねえよ！！」

メイとバジヤードはいとこである。いとことは言え、昔からかなり仲が悪く、会う度に衝突している。

今もお互い火花を飛ばしている。

二人とも良い歳になったと言うのに、こうなると低レベルなとっつかみあいの喧嘩になるのは、前々から何一つ変わらない事だ。

そんな事をしていたらまたま通りかかった婦長に「病院で何暴れているの！！」と怒られたが、それは当然の事である。

宮廷病院の長い廊下を、レイデンとDr・ブレイメル、オルガムが歩いている。

「ところで、レイデンは今セリア嬢を看ているのだろうか？」

いきなり、Dr・ブレイメルがレイデンに問いかけた。

「ああ、宮廷病院が受け入れなかったからな」

「私たちが拒否した訳ではない。魚座宮主が公になる事を嫌がったのだ」

調剤室に行く途中、話は銀河病の事に及んだ。セリア嬢の事だ。

「容態はどうかね」

「……………」

レイデンは少しばかり黙ると、フードの中で瞳を細め、声を低くする。

「…既に末期だ。そろそろ進行抑制剤も効かないだろう」

「……………」

Dr・ブレイメルとオルガムは、その言葉で彼女の未来を理解する。

「そうか、仕方の無い事だとしても、惜しい人を失う事に変わりはないな」

「最有力の妃候補として噂されていたのにな。世間はすぐに忘れてしまう…今じゃ彼女の名を挙げる者は居るまいよ」

レイデンはついこの前、彼女に薬を処方しに行ったときの事を思い出す。

彼女は既に、死を覚悟しているようだった。

「銀河病は残酷だ。それにかかっただけで、既に死人のようだ」

「無理も無い。助かる例も、見込みも無いのだ。0%と5%では、希望の持ち様がまるで違うのだ」

「……………」

銀河病は惨い病である。病と言うよりは、呪いのような。

それは星守の民の最大の恐れ。

星の宮の一つの裁き。気まぐれ。

回避できない絶対的な死。黒い銀河が体中に広がり、やがてブラックホールと言われる眼のような核が出来る。

それが心臓に至ったら、もうどうしようもない。

激しい痛みと共に皮膚が爛れ、結晶化し、その銀河は骨すら飲み込む。

いったい何の罰だと言っのだろう。

4：大賢者ルイの遺言

メイは息を飲んだ。

銀河病患者専用の別棟に足を踏み入れるや否や、変わった空気ของ 重さに体がすくむ。バジヤードは何て事無さそうだ。彼は自分の総合病院で同じような空気を何度も味わっているからだろう。

体中に黒い斑点が浮かび、所々でキラキラ光る。体から出た膿が結晶化しているのだ。

それが銀河の様に見えるから、銀河病。

星守の民の古い歴史上、神話の時代から存在すると言われている。

そして今まで、誰一人克服できなかった病。

この病の上では、貧しい者も豊かな者も、賢者も国王も皆同じ運命をたどる。お金があれば、なんてことは決して無い。

故に星の宮が施した唯一の“平等”とも言われている。

この病は、宗教的に神話と深く関わるため、暴いてはならないと言う考えが古くからあった。しかし前の天上界戦争以降、銀河病患者が急激に増えた事から、何かしらこの病にも理由があり、その性質を暴く事で何とか特效薬を作る事は出来ないかという流れになって来ている。

それは天秤薬局のレイデン師の功績が大きい。

彼が創り出した銀河病の進行抑制剤は、この病の絶対寿命を大幅に伸ばす事が出来る。

発見された時期、薬を使用したタイミングにもよるが、この薬によ

る副作用もそれほど無く、実に画期的な開発とされ、レイデンは賢者の称号を得た。

今ではレイデン師、Dr・ブレイメルが銀河病の第一人者として名高い。

しかし、戦前は10人に1人の死因が銀河病とされて来ていたが、戦後は10人に3人が、この銀河病で亡くなっていると出ている。何一つ、解決していないと言う事だ。

「どうして別棟で隔離してるんです？ 銀河病は感染性の病ではないのに」

「一般的にそう言われているだけで、その根拠はどこにも無い」

「でも…これじゃあ箱詰めのように…」

一部屋に連なって横たわっている患者の様子は、確かに圧迫感がある。

「確かに、これはあまり良い環境ではない。しかし、だからといって銀河病患者の受け入れを拒否すると言うのか？ それでなくても入院待ちの患者が山ほどいると言っているのに」

「…そ、それは…」

「他の棟に移せと？ 他の病の患者の精神面はどうなる？ お前も感じただろう、銀河病は呪いのような“毒気”がある。他の患者がこの毒気にまいてしまったらどうなる」

「……………」

メイは唇を噛んだ。

バジヤードの言う事はもつともで、何一つ間違っていない。

彼は流石に病院勤務の医師と言っただけあり、患者全体のことを考えることが出来る。だが、それ故に慣れきってはいないか。

この病は、“仕方が無いのだ”と。

「……………だから嫌なんだお前は。患者への感情移入が激しすぎる」

「……………」

バジヤードは頭を抱える様にメイを横目に見た。メイは口をつぐんだまま、目の前の患者の、生きた心地のしない表情を見ていた。

生きる喜びも、希望も感じられない。あるのは絶対的な死へのカウントダウンと、何もかも諦めたような、どこか空を見つめるような瞳。

何でこんな病があるんだろう。

そう思わずにはいられない。

「銀河病を決して恨むな、メイ」

母、シャラバトマ・ルイが最後に言った言葉だ。

でも、それは無理だよ、母様。

どうしてこんな病があるのだろう。そう思わなかった事はない。

母、ルイは天上界でも3人しかいない大賢者の称号を持った偉大な魔女であつたが、銀河病には勝てなかった。

死はあつけないものだ。

あんなに恐れられていた魔女が、何て事無く簡単にこの世からいなくなるのだから。

「どうして！！ どうして母様を助けられないの！！ あなたは天上界一の星薬師なんでしょう！！」

メイは、母を助ける事は出来ないと云ったレイデンに泣きついていった。

側ではDr・ブレイメルも、バジヤードもいた。誰もが沈黙し、もう手をうつ事は無く、彼女が安らかにいくのを見守るうとしていた。

「メイ、やめなさい」

母、ルイは掠れる声でメイに語りかける。

「銀河病は星の宮の意志。解き明かす事も治す事も不可能。そしてそれは、許されない事だ。これが天上界を支える理ならば、私は決してこの病を治そうとは思わない」

「……………母様…でも……………でもっ!!」

ルイは自分が銀河病に冒されている事を前々から知りながら、決して誰にも言わなかったし、レイデンの進行抑制剤も求めなかった。その時点で、彼女がどれほどの病を受け入れ、納得していたか分かる。

「私たちに、銀河病を克服することは出来ないよ……………なあ、レイデン」

「……………」

「あんたは自分の薬で数多くの民を救ってきたが、ただの一人も銀河病から救う事は出来なかった。…それでもあんたは戦い続けるのか」

「ああ…そのつもりだ」

「……………お前も物好きな奴だ。諦めた方がいつそ楽だろうに。救えないと言う罪悪感は、あんたが諦めない限りずっと降り積もっていくよ」

ルイは霞む瞳で、それでも眼差しの鋭さを怯ませる事無く、レイデンに投げかけた。

レイデンは黙ったまま、彼女を見おろしている。

「それって……………それってどういう事？ 発症したら生きる望みも持っちゃいけないの？」

「その方が楽だろうね。私はその道を選んだ」

「そんなのおかしい!!」

メイはルイの枕元にしゃがみ込んで、涙を溜めて訴えかけた。

「そんなの…まだ死んで無いのに、死んだようなものじゃない!!」

「……………」

「母様は最初から諦めちゃったの!？」

メイは行き場の無い憤りを、どうすれば良いか分からなかった。彼女が、あんなにも偉大で不可能なんて何一つ無いのだと言わんばかりに力のあつた母が、こんなにも弱々しい。

ルイは弱り切った瞳で我が子を見つめ、そして、銀河病に冒された真つ黒な手で、彼女の手を取る。

その手はとてつもなく冷たかった。

「いずれ、あんたにも分かる」

声は低く、まっすぐに突き刺さった。

「それでも納得できなかったら、あんたもレイデンと同じ様にいばらの道に行くが良いさ。そしてそれは、半端な覚悟では到底乗り越えられない」

ジワジワ、銀河病の侵蝕が音を立てて聞こえてくる。今まさに、この病がくすくす笑いながら、彼女を連れて行こうとしている。

ジワジワ、ジワジワ、目の前に死への導きをしようと、手が差し伸

べられている。

「良いかいメイ。銀河病を恨むなら、憎むなら、これ乗り越えるべきだと思うなら、覚悟を持つ事だ。絶望感と無力さにうちひしがれながら、それでも、銀河病から民を救う道を探し求めるといい」

最後の言葉を言い終わった時、彼女の体は全て、真つ黒な銀河に飲み込まれた。

ジワジワ、うごめくその病の息づかいだけが、彼女の体にまとわりついている。

「……………母様」

動かなくなった母は、紛れもなく、決して手の届かないところへ行ってしまった。

宮廷病院の銀河病患者たちは、皆生きた屍のようだ。

子供も、大人も、老人も、等しく同じ“死”へ向かい。

どうしてこんな病があるのだろう。助かると言う希望も、助けられると言う希望も無い。

母さん、私はこの病を恨まずにはいられません。

どこからも未来を探せないのです。見いだす事も出来ないのです。

誰からも、もう助からないのだと諦められても、本人が生きる事と
とうに諦めていても、私たちは諦めたくない。

メイは、一番近くのベットに横たわる、中年の女性患者に近寄った。
そして、彼女の手を取って、語りかける。

「どうか、希望を捨てないで下さい。私たちは、決して諦めません
から」

「……………」

女性は、メイの声を聞いて、驚いたと同時に瞳に色を取り戻す。

「…お前…」

バジヤードは眉をびくりと動かした。

馬鹿げているって言われたって、どうせ出来ないくせにつて罵倒さ
れたって、それでも良い。

誰もが口に出出来ない明日への希望を、それでも信じないと始まらな
いでしょう。

明日もあさっても、不変であるわけない。

何かが変わるきっかけは、きっとあるのだから。

5：疲れたかい？

「セリア、お前はこの天上界の王妃となるのだ」

暗い雲海の水底の、ディープブルーの揺らめきを、セリアは何となく“死”の世界の様に思った。この病になるまで、そんなこと一度も思った事無かったのに。

彼女の尾ひれが、一度バスタブの水面を打つ。

随分昔の事の様だ。

まだ私がこの国の王妃に最も近い存在だなんて言われていた頃。お父様がそれを望んでいたから、私は一生懸命、民の理想であろうとした。

彼女は絹のクッションに頭を埋めた。その度に音のなる髪飾りが、いやに重い。

「常に、圧倒的に、完璧であれ。他を寄せ付けない程、近づく事などできないというほどの輝きで」

ごめんなさい、お父様。
ごめんなさい。

あなたの理想を叶える事が出来なくて。

彼女は涙を流していた。この病になって、それまでの生活が一転した。彼女はこの水底に隔離され、表に出る事も許されない。

銀河病である事は伏せられているが、民はきつと噂をしている。ああ、あの方は脱落してしまったと。

ごめんなさい、お父様。

この魚座宮の家柄に泥を塗ってしまったて。

あなたの期待に応えられなくて。

「疲れたかい？」

病がジワジワ、問いかけてくる。銀河の甘い囁き。

「……………ええ」

セリア嬢は、黒く染まった手を見て、そして銀河の果てを見た。

「もう、疲れたわ」

王宮の調剤室は戦場のようだった。

今夜の儀式までに新型星インフルエンザの特効薬を作らなければ、この星守の民の歴史に残る汚点となる。

儀式はいたってシンプルで、毎晩決められた時間に、この天上界中にある“星の宮”に星火^{せいか}を灯すだけだ。そしてこれは、ペガサス星火部隊という者たちでなければならぬ。

レイデンは既にこの特効薬の暗号を解いていた。渡されたカルテ、取り出した菌、病状から、メディカルピクシーの声を聞きつつ、複雑な調剤方法を編み出したのだ。

熟練の星薬師であれば、こうやって病を克服できる薬が作れる。

調剤室には大きな天秤が機械の様に並んでいる。

数人の星薬師がそれを取り囲み、調剤すると言つのがここのやり方だ。

一度レイデンが手本を見せれば、ここの星薬師たちはもう出来る。それくらいは優秀だ。

「一段落ついたかね」

Dr・ブレイメルは、大きな天秤で大量に調剤している様子を見ているレイデンに声をかけた。

「ああ、これで今夜には間に合うだろ」

レイデンは少しお疲れの様だ。

「流石はレイデン。賢者の称号はだてじゃないね。ここの星薬師がいくら考え倦ねても見つからなかった調剤方法を、こんなにすぐに見つけてしまうとは」

「新型とは言え、過去発見されて来たあらゆる調剤方法からヒントは得られる。もう星インフルエンザに土星の輪苔は効くまいよ。代わりに水星の鱗でなければ。それはメディカルピクシーの声を聞いてれば分かる事だ」

「ピクシーたちの言葉が分かる者はそうそう居ない。この時代じゃお前とメイくらいのものだよ」

「……………」

Dr・ブレイメルはニヤニヤしている。何がそんなに面白いのかレイデンには理解できないが、Dr・ブレイメルはそう言う人だ。レイデンこそ長生きして来た賢者であるが、Dr・ブレイメル程ではない。

流石は大賢者であつた偉大な魔女、ルイの弟と言ったところか、なかなか腹が読めない人物だ。

「メイを弟子に取つたのは、彼女がピクシーの言葉を理解していたからだろっ？」

「……………何、単に雑用係が欲しかっただけだ」

「またまた、君って男は本当に分かりやすいタイプのツンデレだねえ」

「良い歳して、最近の若者の意味不明言語を使うなブレーメル」

白いひげを撫でながらしらっとした態度のブレーメルに、レイデンはイライラしながら、床を杖で打った。

そのとき、調剤室にいきなり駆け込んで来たメイの金切り声が、二人の老体に響く。

「師匠！！ やっぱり私もお手伝いします！！」

「…お、おい、やめろメイ！！ 足下！！」

レイデンは何かに気がついた。入口からこちらに向かってくるメイの足下には、星薬師が天秤に送る星の魔力の誘導装置があった。普通ならそれを踏んだとして何ら影響は無いのだが、“メイ”だけは特別だった。

そして案の定彼女はそれを踏む。

プシュー

一番側にあつた大型天秤の動きが鈍くなる。そこで作業をしていた星薬師たちが、何事かとパニックになっている。

「……………てめえ……」

「あ、あははは。こんなところにこんなものが…」

レイデンはフードの中からメイを見おろし、大層ご立腹だ。メイは彼から視線を逸らし、とぼける様に頭をかいた。

「あらら。そう言えばメイは、他人の星の魔力を遮断する体質だったよねえ。触ってる人の避雷針変わりになって、逆に自分の魔力にするっっている………」

「どうしてくれる、一号天秤の動きが鈍ってるじゃねえか。調剤のタイミングが狂ったら、いい薬は出来ねえってのに」

床の誘導装置から、すぐさまメイが飛び退いた事で、やっと一号天秤の動力は元に戻り始めた。

レイデンはメイの首根っこを掴み、再び調剤室の外に放り投げる。

「ぎゃあ痛い!!」

「今回は黙って待ってる。このトラブルメーカーが」

メイは放り投げられたポーズのまま、「そんなあ」と。レイデンはためらい無く調剤室の扉を閉め、鍵までかける。

外で腕を組んで待っていたバジヤードが、「やっぱりね」と嫌みな笑みを浮かべつつ若干引いている。

「ほら言っただじゃないか。今のお前じゃ何も出来ないって」

「…くっそ」師匠のバカ野郎…今夜のスープにぞうきんの絞り汁入れてやる………」

「……………うわっ…」

バジヤードは何やら想像して気分が悪くなっている。メイは跪いたポーズのまま、恨み言を言いつつも、やっぱり自分は大事なところでもいつも失敗するな、と反省もしていたのだ。

「まあ、気持ちとは分からなくてもないが、今回は一大事だ。失敗は許されないのだから、大御所に任せておくのが一番良いさ」

「……………」

メイはやつと立ち上がり、バジヤードが背もたれにしている壁のところまで来て、おとなしくなった。

と、思ったら今度は廊下の向こう側から悲鳴にも似た役人の声が聞こえる。

「レイデン殿！！ 大変でございます！！！！」

「……………あれ？ 役人さん？」

「メイ殿！！」

役人は帽子を押さえながら、慌てふためきやってきた。

「大変でございます！！ 魚座宮の姫宮、セリア様が…っ」

「…！？」

メイの心臓が一度高鳴った。
嫌な予感で。

王宮をバタバタ急ぎ走るのは、メイと、レイデンだ。
白鳥の引き車には既に役人が待っている。

「後は任せたぞ、ブレーメル」

「……ああ、こちらはもう大丈夫だ、オルガムが上手くやってくれている。それよりお前は平気なのか？ 新薬の開発にかなり魔力を消費しただろう」

「……………そんな事も言ってもらえない」

メイは心配だった。

レイデンは凄腕の星薬師だが、星の魔力を受ける器（星の魔力を溜め込む容量）はそれほど大きくない。通常のような調剤リズムなら大した事無いが、今日は新薬の開発に大層魔力を使ったはずだ。

「出します」

役人がそう言うと、白鳥は王宮の中層から飛び出した。

この前セリア嬢に会った時、彼女は気分がいいと言ってたが、もう既に何か覚悟しているような、一つの諦めに達しているような表情をしていた。ふとした時に不安になる様な。

「…………セリア様…」

彼女はいきなり発作に襲われ、それが収まらないらしい。自分たちが彼女の元に辿り着くまで、どうかと思わずにはいられない。

メイはレイデンを見た。

「大丈夫ですか？」

「何が」

「随分お疲れのようですよ。魔力があまり残っていないんでしょう。こんな状態で銀河病の抑制剤を調剤したら、それこそ師匠がぼっくり…」

「縁起でも無い事を言っな」

レイデンは自分の杖を支えに、やはり少し辛そうにしている。メイは彼の肩に触れようとしたが、慌てて手を引っ込める。そして、出来るだけ彼から離れ、引き車の橋でピシッとしている。

「……………？」

「だって、私が触ると魔力が遮断されます。少しの間でも充電しないといけないのに」

「……………」

「私、何でこんな体質なんだろう。私が沢山魔力を持ってたって仕方が無いのに。どうせならこの魔力を、誰かに分けられる体質なら良かった。その方がよっぽど人の為になるのに」

彼女は膝を抱え、窓からこの天上界を見おろしている。

メイは、天上界で平均と言われる星の魔力の器の容量を、遥かに越える大きな器の持ち主だ。

そう言った特別な器を持った者を“星の申し子”と言われる。そしてそれは、この天上界でも数えられる程しか居ない。

「……………お前がその力を持って生まれたのにも、きっと意味がある。上手くいかない事があるのは当然だ。大切なのは、自分の持っている力を、必要な時に十分発揮できるかと言う事だ」

「……………必要な時に？」

「ああ…出来ない事が出来ないのは当然だ。だが、出来るはずの力があるのに、出来なかった時…それが一番が後悔する」

「……………」

師匠にもあったのだろうか。

出来るはずだったのに、出来なかった事が。

助けられるはずの人を、助けられなかった事が。

6：明日もあさっても

「…お父様、どうしましょう。私、死んでしまうのでしょうか。私、銀河病に……………」

「何て事だ。これでは妃候補から脱落してしまうのではないか!！」

「……………」

お父様、どうしてです。

「セリア、お前はもう既に死んだようなもの。銀河病は治らない。魚座宮からこの病が出た事は隠し続けなければ、アリアの妃レースにまで影響が出かねない。お前は、この深海の部屋から出る事は許さない」

待つて、お父様。

お父様。

明るかった世界が、それでも偽りの明るさであつたがその世界が、いきなり現実の暗闇となつた。

今まで作り上げて来た、沢山の虚像が、みるみる壊れていく。

偽り続けた事が、私の罪だと言う事ですか。
だから私は星の宮の罰を受ける事になったと。

「セリア様!!!」

いきなり声がして、セリアは霞む視界を意識した。メイと、レイデンがいる。

「メイさん…レイデン師…」

「もう大丈夫だ。今から抑制剤を調剤する」

メイとレイデンは既に調剤の準備に取りかかっている。

そんな様子を、何となく視界で捕えたセリアは、こみ上げる苦しみと同時に、なぜかとても切なくなる。

レイデンは平静を保っているが、とても調子が良さそうではなかった。

ぶつぶつしもべたちに語りかけながら、不安定な魔力の中調剤している。

メイが、彼の事をとても気にかけている。

セリアはとても切なかった。

「レイデン師…もう、結構です……………私はもう…」

「何を言っているんだ」

レイデンは齒を食いしぼり、諦めつつある彼女を叱咤した。

「バカを言つな!! お前が諦めても、俺は調剤をやめないぞ!!」

「……………」

ぐったりしたまま、セリアは涙を流した。

メイがピクシーの錬成を終え、急いで彼女に駆け寄る。

「セリア様、セリア様っ。嫌です私、私、セリア様に死んでほしくない……………」

銀河病で真っ黒になったセリアの顔をまっすぐに見る。

「私たちは、みんなあなたに夢中でした。女の子たちは、あなたの様になりたいと思って…………っ。私だって…」

「……………」

セリアは目を細める。冷たい体に、頬を伝う涙だけが生温い。

例え、自分が誰からも忘れられても、それは仕方の無い事だと思っていた。

世間は常に新しい理想を求めている。

使い物にならなくなった私は、もういらないと。

父からも兄弟からも、もう死んだ者の様に扱われ。

私はまだ、生きているのに。

ジワジワ、銀河の魔の手が体を蝕む音がする。その音は、もう間近までやって来ているのが、私には分かっている。

「ねえ…メイさん。病を治すだけが、救いでしょうか」

セリアは一瞬、とても安らかな笑顔を作った。もう既に、表情が分かるような状態でもなかったが、そうだとメイには理解できた。

「私は…銀河病を発症したときに、すでに生きる事は諦めていたのよ。だって誰もが、私を死んだ者の様に扱うから…」

「……………」

「でもね、あなたたちだけは、私を諦めてくれなかった」

彼女は声を絞り出していた。
言葉を作るだけで、きつと激しい痛みに襲われているはずだ。喉にも黒い銀河が広がっている。

「あなたたちの作る薬って不思議ね。病以外に、もつと大切な物を癒してくれるのだから。生きているのだと言う実感を、与えてくれるのだから……」

「…………セリア様……？」

「……………ねえ、メイさん。私の装飾、全部取って下さる…………？とても、重くてかなわないの…………」

「……………」

メイとレイデンは、その言葉に、何かもう全てのどうしようもないしがらみを感じた。

彼女を今まで縛っていた、沢山の重圧。それに耐えられなかった心と体。

激化する妃レースの、深い闇の部分の呪いを、一身に受けてしまったような、銀河病と言う結末。

メイはそつと涙を流し、コクコク頷きながら、彼女の髪飾りやネックレス、腕輪などの装飾を外していった。

沢山の宝石や、金銀があしらわれたそれらは、恐ろしく冷たく、美しいだけのただの鎖の様だ。

長い髪を解き放って、それはゆらゆらと水面を這っている。彼女の髪は、キラキラした天の川の流れの色だ。

「ああ……………重かったわ…………」

セリアの声が、軽く安らかになる。大きく息をつく様に。
メイは彼女の手を取って、首を振った。

「嫌です、こんな事って無い。セリア様が何をしたって言うの。嫌です!!」

メイの声だけが、もはや諦めに待ったをかける唯一のものだ。

レイデンは調剤を続けながら、それでも、この調剤が無意味な事を知っていた。

ここまで進行していて、いまさら進行抑制剤は役に立たない。

すでにブラックホールが心臓に到達しつつある。

「……………!?!」

ところが、レイデンはその銀河の進行に僅かな違和感を感じた。
先ほどまでの進行速度が、急激に落ちている気がする。

ジワジワ音を立てて、すぐにでも心臓を飲み込めるところまで来ているのに、そこから進みが遅いのだ。

「……………」

なぜだ。

レイデンはこの緊張下で、考えを巡らせる。

前にもこういう違和感を感じた事がある。偉大な魔女、シャラバトマ・ルイの危篤の時だ。

もう助からないと分かっていたが、最終段階でのブラックホールの侵蝕が嫌に遅かった。

だがあのときは、シャラバトマ・ルイの魔力がその進行を止めていたからだとばかり思っていた。

なぜだ。

「……………」

共通点の一つ。

メイが居る事だ。

彼女が患者に触れていると言う事。

彼女は星の宮から流れてくる魔力を、避雷針の様に自分に集める事が出来る。彼女が触れている間、その者は魔力が供給されない。

『まさか……………銀河病は……………』

レイデンが一つの疑問に至ったちょうどその時、セリア嬢の指先から流れている水滴が、地面へ落ちた。
弾けた。

泡が。

ジワジワジワ

黒い瞳が喰い破ったのは、一つの星。

体全部を真っ黒な銀河が覆い、力の抜けたそれは、その瞬間に水底に沈む。
泡を転がしながら。

メイもレイデンも、目を見開いた。
水に沈んだ彼女の体は、もう浮かんではこない。

「……………」

「……………っ」

レイデンは既に完成しかけていた薬の調剤をやめ、杖を落とした。
彼の周りでもべたちがうろろしている。

メイは目にいっぱい涙を溜めながら、冷たく真っ黒になった、まったく動かない彼女の手を、いまだに握っている。

「……………セリア様……………っ」

誰にも知られることなく、家族にも見守られる事無く、彼女は深い海の底で死んだ。
もの言わぬ深海魚の化石の様に。

何が理想の君だ。

こんな最後、虚しさ以外の何ものでもない。

「魚座宮の奴らは薄情な人たちばかりです。だって誰もセリア様を看取ってあげなかったんだもの。……………可哀想なセリア様…」

すでに夕暮れのオレンジ色の平たい道上で、メイは呟いた。
重い体を引きづりながら、泣きはらしたぐちゃぐちゃな顔はそのまま。

レイデンは杖をつきながら、表情は淡々としたものだ。彼はたくさん銀河病患者を診て来た。
その数だけ、死を目の当たりにしたのだろうか。

「……………魚座宮は歴史ある宮主の家柄だが、その権威を保つ為にいろいろ手を打って来た黒い家柄だ。今回の妃レースだって、セリア嬢の敵となる存在を排除しまくったのが、彼女の父だと言う嫌な噂もある」

「……………でも、セリア様に罪は無いですよ。彼女はとても輝いていたもの。それは、真実だから」

「……………ならそれを、お前が覚えていれば良い」

レイデンは後ろからついてくるメイをチラッと見て、そして前を向いた。
何かを見据えている。

「俺たちに、悲しんでいる暇はないぞ、メイ。辛くても、一人一人の死の上に薬を創り出さなくてはいけないのが星薬師だ。その積み重ねが、次の患者を救うかもしれない。セリア嬢の死も、決して無駄にはなるまいよ……………」

「……………」

「明日もあさっても、薬を作っていかなければいけないんだ。どんな病の、どんな薬でも…」

「……………明日も、あさっても……………」

ぽっかりした空虚な胸の疼きを、痛みを、きつとずっと忘れられないだろう。

師匠も、毎日毎日沢山の痛みを抱えているのだ。それと引き換えに、

薬を創り出している。

メイはゆっくり、空を見上げた。
生きると言う事だけが、こんなにも難しい。

夕焼けに染まった天上界の更に上の空。夜がやってくる。

「……………あ…」

メイは、空を翔るペガサス星火部隊を見つけた。彼らは上空に点在する星の宮に、星火を灯し始めた。

「間に合っ たんだ……………」

一つ一つ、灯されていく星の光。
それは星座を象って、いつしか地上へ届くだろう。

よかった。

これで今夜も、星が輝く。

天秤薬局く用語集1く

《用語集》

天秤薬局本編における造語や地名などの用語集。ネタバレとなる恐れがありますので、ご注意ください。

天上界てんじょうかい

星の光を守る為に存在する世界。
地上と正反対の世界。

星守の民ほしもり たみ

天上界に住み、星の光を守る為に存在する者たち。
毎晩星の宮に灯をともし事で、星の魔力の恩恵を受ける。
働く事を重要視されていて、働いていない奴、または仕事のできない奴は“星クズ”と言われるが、最近こういう者が増え、新たに“ひとで”とも言われるようになった（動かない輝かない星の意味）
自分の技術を次の世代に渡す事も重視され、跡取りを必要とするため、世間は“結婚”に関心が多い。
結婚できないと“輝き遅れ”と言われるりする。

天秤薬局てんびんやつきょく

天上界の天秤座にある老舗の薬局。

現在はレイデンが店長で、弟子のメイと二人で運営している。

薬と名のつくものなら法に裁かれない程度に何でも扱っていて、それらは全て上質である。

天秤薬局の地下（雲中）には調剤に必要な薬材の揃う広大な庭園がある。

リンゴジュースが名物の一つである。

星薬師せいやくし

天上界の薬剤師のこと。

星の魔力を使って薬を調剤する。魔法使いのようなもの。

星薬師になるには、まず国家資格を持つ星薬師の弟子になる事が義務づけられている。

メディカルピクシー

天上界の静物に宿る精霊の中でも、医療に使われるものをメディカルピクシーと言う。

命あるものにはかならず星の宮の恩恵として魔力が配給されるが、植物のそれが精霊と化したもの。

薬の調剤の材料となる事が多い。色々な形をしていて、大きさも様々。

ポイズンポプリ

調剤に必要な材料を乾燥させて、保存できるようにしたもの。

これを星水でふやかして戻し、メディカルピクシーを生成すれば調剤できる。

銀河病ぎんがびょう

天上界で最も恐れられている病気。

神話の時代から存在し、完治した例がないため、“星の宮”の絶対的な裁き、また唯一の平等と言われている。

この病気になる原因はいまだ不明。

発症すると、体に黒い痣が現れ、それが広がっていく。皮膚が爛れ膿が結晶化し光って見える為、宇宙と星に見立てられ銀河病と言われている。末期になると黒い瞳のような核が現れ、これをブラックホールと言う。ブラックホールが心臓に辿り着くと死ぬ。

現在は10人に3人の死因がこの銀河病と言われている。

レイデンの開発した進行抑制剤によって銀河病患者の寿命が大幅に伸びたが、いまだに特效薬は作られていない。

星の宮ほし みや

天上界に、88星座を象る星の数だけ存在するお宮。

また天上界の唯一神の総称。

夜の“星の儀式”で、ペガサス部隊によって星火を灯される。これを怠れば星の宮に裁かれると言われている。

星守の民はこの儀式を義務とされている。

星火の輝きによるエネルギーを星の魔力を言い、これは星守の民に配給される。

星守の民はこの魔力をそれぞれの仕事や営みに役立てる。配給される魔力は個人差があり、それは生まれ持った“星杯”の大

きさに見合った分である。

星杯の大きな者は、星の宮によって選ばれた“星の申し子”と言われている。

88賢者

88星座にそれぞれ一人選ばれる、あらゆる分野のエキスパート。

（ただしノーザンクロスノースクロスの配下は50星座。よって50人にの賢者）
領主である宮主と同等の発言力を持っている。これは王都ノーザンクロスによって選出される。

例としては、レイデンが天秤座の賢者。

年に一度、賢者総会がノーザンクロスで開かれる。

大賢者

88賢者の中で、更に3人に与えられる称号。

発言力は宮主以上で、ノーザンクロスノースクロスの大臣と対等。時に王も頭が上がない存在である。

例としては、メイの母、シャラバトマ・ルイは偉大な魔女であり大賢者の一人であった。

88星座と宮主みやぬし

天上界を88に分けた州のようなものを星座としている。

88星座にはそれぞれ宮主みやぬしが存在し、その星座を治めている。基本的に世襲制。

例としては、香弥は双子座の宮主の息子で、次期宮主である。

北十字座（王都ノーザンクロス）の宮主家が、北の星皇家である。

王都ノーザンクロス

88星座のうち50星座を配下とする北の王都。

白いキグナス城をシンボルに発展した都市を形成し、政治の中心となっている。

北の星皇家が存在する。星の宮の総本寺院ポラリス寺院も存在する。

星皇家 せいおうけ

北の星皇家が王都ノーザンクロスに存在し、白鳥の家紋を持っている。

南の星皇家が正反対のサザンクロスに存在するが、過去に謀反が起こり本来の星皇家は滅んでいる。

第二星の登場人物

《第二星 登場人物》

シヤラバトマ・メイ

- ・星薬師見習い
- ・レイデンの弟子

> i 3 3 7 9 1 — 1 3 6 5 <

セミロングの髪にリボン（またはカチューシャ）をつけている。天
上界の老舗薬局“天秤薬局”の見習い星薬師。基本的に敬語だが、
いつも一言多い。レイデンを過度に老人扱いし、彼の後は自分がこ
の“天秤薬局”を継ぐと明言している。大賢者の称号を持っていた
偉大な魔女シヤラバトマ・ルイの娘で、星の魔力を受け止める星杯
が極端に大きいらしい。（要するに魔力が大きい）レイデンいわく、
「容量が大きくても中に入っているデータがクズ」（才能はあつて
もまだ職人として技がなっていないと言う意味）
おしゃべりでハキハキと物申す分、無口で無愛想なレイデンと違っ
て商売上手。

レイデン

- ・星薬師（天秤薬局店長）
- ・88賢者の一人（天秤座）
- ・メイの師匠

> i 3 3 7 9 2 — 1 3 6 5 <

深くフードをかぶって、いつもは顔が見えないが、実際は金髪の美青年（しかし高齡）。誰も克服できなかった銀河病の進行抑制剤を初めて作った人物で、その功績がたたえられ賢者となった。口が悪く無愛想だが、銀河病患者に対しては熱心で、銀河病に打ち勝つ薬を作る事に長年を費やして来た。もともと弟子を取るつもりは無かったが、メイの才能に一縷の希望を抱き、彼女を弟子に取った。

星の魔力を受けとめる星杯はメイ程大きくないが、精錬された技術と経験、努力、なにより銀河病の特効薬を作ることへの執着心によって偉大な星薬師となった。

妻子は居らず、“輝き遅れ大三角形”の一人に数えられている。（偉大な人物なのに結婚できなかった三人のうち一人と言う意味）

香弥^{かや}

- ・双子座宮の若宮
- ・紫衣と双子で、兄

> i 3 4 0 5 6 — 1 3 6 5 <

黒髪で端正な少年。メイと同期。“持っている世代”の象徴的存在で、世間で人気がある。将来双子座宮の宮主となる身分で、既にばりばりに双子座の政治に関わり、手腕を発揮している。上に立つ者のカリスマ的才を持っている。

紫衣の前では完璧な好青年を演じているが、妹がいないところではジャイアニズムを発揮し口が悪くなる。極端なモンスターブラザーで紫衣への依存度は高い。しかし冷静に紫衣を星皇室の妃にする為の後ろ盾となるのが役目だとも思っている。

文武両道で、星の魔力を武力として利用するため、剣を持っている。（上に立つ者としてはあるにこした事の無い力）

紫衣^{しゐ}

- ・双子座宮の姫宮
- ・妃候補の一人
- ・香弥と双子で、妹

> i 3 4 0 5 7 — 1 3 6 5 <

黒髪の美少女。メイと同期で、親友と言える仲。賢く優しく美しく、今の妃候補の本命と言われている。お嬢様だが両親が“やる事さえやっていれば後は自由”な教育方針だった為、よく外に出て活動している。好奇心旺盛で、ロマンチスト。恋に恋するお年頃で、香弥

と違って兄への依存度はそれほど高くない。

基本的に何でも良くできるが、笛は香弥の方が上手。

触れた者の過去を垣間見れる事が出来る“記憶管理人”としての特殊能力を持っている。そのため他人への感情移入が激しい。

バルデ・バード

・星皇室お抱え吟遊詩人

大きな帽子をかぶり、ギターを抱えている。天上界を旅し、主に情勢を監視する役目を持っているため一つ所に留まる訳にはいかない。常に動いている。

ポレー・アリエス

・バルドの恋人

盲目。バルデとは恋仲であった。

7：カリスマの双子

天上界は今日も通常運転。星の宮の恵みはいつも通り。

星守^{ほしもり}の民は変わらず毎晩、“星の宮”に星火を灯す。それが彼らの存在理由であり、義務である。

何一つ変わらない星の配列、その光を守る事で、得る輝きのエネルギーを営みに役立てる。

何一つ変わらない。変えてはいけない。

それは、星の宮の意志。

> i 3 3 6 6 1 — 1 3 6 5 <

第二星　く双子の星く

「え？　紫衣さんが恋を？？　な、何ですってー！？」

メイは天秤薬局のカウンターから身を乗り出しながら、その話に食いついた。

カウンター越しにはメイと同世代に見える少年が、なにやら気に入らないと言う表情で、メイの出したリンゴのジュースをちびちび飲んでいる。

彼は双子座宮の若宮様、香弥だ。

黒髪に端正な顔立ちは、双子の妹の紫衣と同様に、彼らがカリスマの双子と言われる一つのステータスだろう。

「ちょっとちょっと、詳しく教えて下さいよ!!」

キラキラした表情のメイは、天秤の皿を拭く手がおろそかだ。しかし、香弥は真逆に頭を抱えている。

「あああ!! なぜだ紫衣さん!! なんてあんな男に!!」

「だから、そこんとこ詳しくって言うてるのに!!」

双子座宮に生まれた、めでたい双子の姫宮と若宮は、“持っている世代”と言われるこの世代の象徴と言っても良い。

兄の香弥^{かや}は将来の宮主として期待され、妹の紫衣^{しい}は最有力の妃候補として噂されている。

双子座は安定した財力、人材、支持される宮主を兼ね備えた充実した星座だ。

働き手も働き口も多く、商業が栄え、あらゆる星座間の物品が集う華やかな港町が中心となっている。

商業の中心というのがこの星座の経済を支える要となり、賑わいは衰えを知らない。

色々な星座から人が集まる星座のため、問題も多く発生するが、それを速やかに排除できるのが双子座の信頼に繋がる。

双子座宮の治安は“双壁^{そうへき}”と言われる御用部隊によって守られ、商人たちのルールは絶対で、それを守らない輩は厳しく取り締まられているのだ。

この双壁を率いる香弥は、まだ若宮の身でありながらカリスマ的人気をほこり、それは次期宮主への期待でもある。

現双子座宮の宮主である、香弥と紫衣の父は、気の穏やかで人望のある人物であるが、争いごとには少々つめの甘いところがある。

今では息子の香弥に「見てられない」と言われ、双子座の政治の行動を奪われつつあるが、まあそれも嬉しいと言わんばかりの親ばかりで引退も間近と言われている。

経済が潤えば軍費も多くかけられる。

既に戦争の終わった時代だが、軍事力は抑止力となり、星座の権力を誇示する目安ともなる。

そしてそれは、宮姫である妹、紫衣の妃レースにも影響する。

メイには覚えのある人物である。

宮廷お抱え吟遊詩人ぎんゆうしじんのバルデ・バード。

彼は有名人だが、紫衣との接点は全く見当たらず、かなり意外である。

どこかの宮主のおぼっちゃんだろつかと、メイにはそのくらいの予想しか出来なかった。

「だって、すごい年上じゃないですか!!」

「どうにもこうにも、最近毎日楽しそうに出かけると思ったら、あんな男の所へ通っていたなんて……っ。俺が取り締まりで忙しくしている隙に……そんな……許せんっ……」

香弥はカウンターに突っ伏して、リンゴジュースの入っていたグラスをムギギと握りしめる。
割れそうな勢いだ。

「許せん!! たかが吟遊詩人風情のスナフキンが!! あんな低所得の宿無しに、僕が蝶よ花よと守って来た紫衣さんを奪えると思っっているのか!!」

「……………」

「許せん許せん!! 潰してやる潰してやる!!」

「ちょっと香弥君…物騒ですよそんな」

メイは多少引き気味で、「グラスを壊さないで下さいよ」と、香弥に乱暴に扱われるグラスを心配した。

「良いじゃないですか、こっそり恋愛くらいさせてあげたって。紫衣さんだって恋するお年頃でしょう」

少し前の事だが、メイと双子が同じアカデミアに通っていた時の事を思い出す。

「私たちがまだアカデミアに通っていた頃を思い出して下さい。あんた片っ端から紫衣さんに近づく男子生徒たちを、まるでアブラムシ除去かのように、残酷にむしり取っていったじゃないですか。おかげで紫衣さん自分の事モテないって思っていましたからね」

「……………」

香弥はしらつとしている。

世間ではこいつを好青年で男前のカリスマ若君とか言っているが、メイから言わせてもらえば、それは幻想でしかない。

確かに表向きはそう見えるかもしれない。こいつは紫衣の前でも徹底してそうしているし、実際に見目麗しい。

上に立つ才能もあると思うし、将来良い宮主になるだろう。

しかし、真の姿は“シスコンひとりよがり”だ。

「うつせえ、ばか。紫衣さんは将来この国の妃になるんだ。スキヤンダルなんかになったら妃レースに影響が出るだろうが。お前みたいなパンピーと一緒にするな」

と、メイに対してはご覧の通り。

紫衣以外の女性を女性とも思っていない。

「……………」

メイはがくつと頂垂れ、目の前に居る幼なじみを哀れみの目で見る。

「……………可哀想に香弥君。紫衣さんみたいな出来の良い妹がいるばかりに、きつともう他の女性を愛せないんでしょう。双子座の栄華もここまでとは…」

「……………は？」

「かわいそう、かわいそうに香弥君」

「…え？ え、何お前、ちょ、ふざけんなよっ！！ え、何それム力つく！！」

香弥はメイの嘔泣きに腹が立って、彼女の胸ぐら掴んでギヤーギヤー物申しているが、メイは哀れみの表情を崩さない。

香弥はカウンターの上のグラスを持つ手に、思いあまって力を込めた。

驚いた事に、グラスがピシッと音をたて、ひびが入った様だ。

「うああああ、何て事を！！ そのグラスお気に入りだったのに！！」

「ほら、嘔泣きじゃねえか。人をおちよくるのもいい加減にしろ、この天の邪鬼が！！」

双子とは同世代で長い付き合いであるため、お互いの事は割と理解している。

香弥がこういう、とんでも俺様ジャイアンな性格だと言う事は、幼

い頃から知っていた。彼に理想を抱いている者がこれを知ったら泣きたくなるだろう。

だが、香弥はこの様に公私の姿を使い分けている人物だ。本音で愚痴を言いたい時などによく天秤薬局てんひやくきょくに顔を出すのだ。

「おい、子供みたいな喧嘩をするな」

奥の調剤室から、天秤薬局の店長であり、メイの師匠のレイデンが出て来た。

相変わらずフードを深くかぶって、表情は良く分からない。

「香弥、お前も暇だな。妹をストーキングする余裕があるとは」

「…それだけ双子座が平和って事です。ストーキング？ 違うね、僕は紫衣さんを守っているんだ。その義務が僕にはある。常に見張っていないとあの子は世間の醜い部分を知らない！！ 男は狼なんだ！！」

「あんたが一番危ないんですけどね…」

メイはやれやれと言う様に、肩を竦めた。

レイデンは短いため息をついて、カウンターの端にある自分の椅子に座り、広げたままの新聞に目を凝らす。

北十字新聞には、ノーザンクロスの情報、星座間の情勢、人気のトレンド、最近話題の人物についてが書かれている。

天上界を旅して回る吟遊詩人、バルデ・バードが、存在の確認できる場所に居ることはこの新聞でも取り上げられていた。

「それに、バルデ・バードといえば、陛下に勲章を授けられた有名な吟遊詩人だ。一つ所に留まる事が出来れば、既に賢者になっていておかしくない。まだ小僧のお前なんかよりよっぽど…」

「うるさいうるさい！！ 老人は黙って新聞でも読んでろ！！」

香弥は怖い者無しの、ある意味勇敢な馬鹿だ。

年上で、賢者でもあるレイデンに対してもこの通りである。

「……………て、てめえ…」

レイデンは「ほお」と口元をひくつかせた。

メイは「これはヤバイ」と思って、会話に割って入る。

「あーあーあー、でもあれですねえ。紫衣さんってば意外と渋い趣味してるんですね。バルデさんもたまに薬局（じやく）に来ますけど、大人だなーって感じですよ。ねえ師匠、ウイスキーが似合いそうな。落ち着きがあつて、懐が大きい人です。…あ、そういうところが香弥君と大違いっていうか…」

さて、場の空気を変えようとしたのに、やはり大事なところで一言多いメイだ。

火に油を注いだようなもので、香弥は額に青筋を立てている。

「……………何だとしてめえ…」

「あ…あはは…いやあ……」

メイは彼と視線を合わせられずに、

「あ、香弥君の割ったグラス…香弥くんの割ったグラス 片付けなくちゃ」

「といやみつたらしい説明口調だ。」

そんな騒がしい昼下がりに、いきなり天秤薬局に駆け込んできた客一人。

「レイデン師！！ ごめんください！！」

それは、黒く長い豊かな髪を、左側に流し結っている、黒目の印象的な美少女であった。
紛れもなく、先ほどまで話題にしていた香弥の妹、紫衣だったから驚きだ。

「し、紫衣さん！？」

天秤薬局に居た面々は、きっと彼女が思っていた以上にあんぐりしていただろう。

香弥なんて空いた口が塞がらないと言うか。

「あら、香弥さん、どうしてここに？」

「紫衣さんこそ！！ だって今日は笛の稽古だって…ま、まさかまたあの男の…」

「？」

紫衣は小首をかしげつつも、何かとても急いでいるようだった。

「レイデン師!!」

彼女はがらにも無くカウンターから身を乗り出し、

「レイデン師!! 失明した目を治す薬はございませんか!!」

「!？」

彼女には到底関係の無かるう薬を要求した。

これには、基本腰の据わったレイデンですら驚いた様だった。

8：光帰す一雫

紫衣は柔らかい着物を僅かに持ち上げて、カウンターの席で一息ついた。

メイの出した冷たいリンゴジュースを飲んで、胸を撫でる。

「一体どうしたんです、紫衣さん」

メイは眉根を潜めた。

隣で香弥がそわそわしている。さっきまでのでかい態度はどこへやらと言った感じだ。

「そうですよ、紫衣さん。失明を治す薬って…一体何が…」

紫衣はチラッと香弥を見て、何だかとても心もとない表情になった。すぐに瞳をレイデンの方へ向け、もう一度聞く。

「レイデン師、失明を治す薬ってございますか？」

「……………」

レイデンはフードの隙間から紫衣を横目に見て、少し間を置く。

「……………ある事は、ある。絶対的ではないが、その者の星杯の大き

さによつては可能だ。ただ、本人の魔力を多く使つたため体への負担が大きいが……」

「……では、治す事は、可能なのですね……」

「……………誰の事だ」

レイデンは、多分一番大切な事を聞いた。

「一体誰の目を治したい」

「……………」

紫衣はカウンターの席で、グラスの底に残っているリンゴジュースの濁りを見ながら、瞳を細める。

「牡羊座に住んでいる、ポレー・アリエスさんですわ……」

「ああ、綿桃の咲く岡の上に住んでいる、ポレー女史。良いところお嬢さんだったのに、世を忍んでひっそり暮らしているって言う……」

メイは、このポレー・アリエスに会つた事こそ無いが、話は聞いた事がある。

盲目で、病弱な、幸薄い美しい人だという印象だ。

「確か、師匠の患者の一人でしたよねえ。ポレー女史って」

「……………」

レイデンは何やら思うところがあるらしく、腕を組んで黙っている。

まるで別人のように物腰柔らかな空気をかもし出している香弥が、優しい声で紫衣に問う。

「いったいどうして、紫衣さんがポレー女史の盲目を治したいと？何か理由があるのですか？」

「……………」

メイはじつとりした視線を香弥に向けたが、軽く爽やかオーラに払われた。

紫衣は黙っている。

突然、レイデンが口を開く。

「紫衣、お前に何があつたかしらないが、ポレー・アリエスの盲目を治す事は出来ない。それは、薬を持っても不可能だ。彼女は病弱で、他に病を抱えている。その病の治療に使う為の彼女の魔力を、目の治療に分ける事は出来ない。それは彼女も分かっている事だ」

「……………」

紫衣はレイデンの言葉に肩を落とし、目を伏せる。

「…ですが、彼女はきっと、目を治したいと思っています…」

「……………」

紫衣にしては珍しく、レイデンに物申す。香弥とメイは顔を見合わせた。

一体紫衣に何が会ったと言っただろう。

レイデンは紫衣をまじまじと見る。

「紫衣、お前ポレー・アリエスと何かあったのか？ 彼女に聞いたのか？」

「……いいえ、彼女は何も言ってくれませんけれど……。でも、私には……」

「例え、ポレー・アリエスがその盲目を治したいを思っている、俺は許可できない。お前には悪いが、こればかり……は……」

レイデンが言葉を途中でやめたのは、紫衣が急に泣き出したからだ。長い袖に顔を埋め、肩を震わせている。

メイは「ど、どうしたんです紫衣さん!?」と驚きを隠せないし、香弥は青ざめてしまっている。

「………すみません…失礼します……」

紫衣はカウンターの椅子から降りて、顔を袖で覆いながらこの薬局を飛び出していった。

カランカランと虚しく音鳴るベルだけが、一時の余韻を作った。

「……………」

「……………」

メイはレイデンをしらっと見て、レイデンも彼女を見る。

「……………はあゝ…師匠が泣かしたんだ…」

「……………え…」

流石のレイデンもちょっと戸惑っている。

青ざめて固まっていた香弥が、いきなり立ち上がった。この世の終わりみたいな顔をしている。

「紫衣さんが泣いている紫衣さんが泣いている紫衣さんが…」

「ちょ、お兄さん…。そんなにびっくりしたんですか?? 兄弟なんだからこういう事も良くあるでしょうに…」

「ええいうるさいうるさい!! 俺がこの世で最も苦手なものベスト3の一つが、紫衣さんの涙だ!! 何て事だ、あの子に一体何が…っ」

そして、思い出したようにレイデンを睨むと、今にも飛びかからん程の殺気を放っている。
だが涙目だ。

「くそじじい…てめえが無神経な事言うから紫衣さんが傷ついたじやねーか…。あああ、どうしてくれんだ…」

「……………」

香弥は頭を抱えながら、どうしようどうしようときどきパニック状態だったが、メイに「追いかけたらどうです?」と言われ、「まさにその通り」と答え薬局を飛び出した。

嵐が去った天秤薬局は、何だか一回り古くさくなったような匂いがある。

扉を激しく閉めたため、埃や塵がそこらを舞ったのだ。

「……………え、やっぱり俺のせいなのか？」

「あれ、意外と気にしてるんですか？ 師匠…」

「……………いや…」

レイデンは再び腕を組んだ。腕を組むと、レイデンが何か考え込んでいると言う事だとメイには分かっている。

彼の、フードの向こうから覗く表情は、いつもと変わらずしかめっ面だけど。

「いや、気になる事はあるな…。ポレー・アリエスに関して…紫衣は何かしら知ってしまったんだ……………」

「と、言いますと…？」

「……………」

レイデンは立ち上がって、カウンターの内側にある無数の棚の中でも、端の上の方にある棚を開けた。

そこには水色の小瓶に入った、液状の薬がしまっている。

「……………失明した目を治す薬ですか？」

「……………ああ…“光帰す一雫”だ」

彼はその棚を開き、在庫を確認した後、それを取り出そうとして少しためらった。

「メイ、お前も紫衣の様子を見てこい。紫衣がポレー・アリエスと何かしら関わりを持ったと言う事は、きっとそこにバルデ・バードも関係しているはずだ」

「え？ 何でバルデさん??」

「……………」

レイデンは机に置きっぱなしの新聞に、視線を落とした。

「バルデ・バードとポレー・アリエスは、婚約していた仲だった。

……………昔の事だな……………」

「……………え？」

レイデンの読んでいた新聞には、バルデ・バードが明日にでもまた旅に出る事が書かれている。

きつと、紫衣があんなに必死になる理由は、ここにあるに違いない。

9：葡萄酒の世界の果て

「そこに誰がいるの？」

綿桃の咲く丘の上に、小さなレンガの家が、ただポツンと建っていた。
辺り一面綿桃の淡いピンクが、まるで空気に溶けるようにそこいらを舞っている。

ポレー・アリエスは、その家に住んでいた。

盲目で、外に出る事は出来ないけれど、一日の少しの時間お手伝いが来てくれて、色々な準備を整えてくれさえすれば、彼女がひっそりと生きていくことに支障はなく、また盲目に慣れるだけの時間はとつくに過ぎてしまっていたのだ。

彼女はベットの上で、体を休めていた。

栗色の、肩で切りそろえた髪が、窓から吹き抜ける風に揺れて、また忍び込んでくる綿桃の花びらが頬をかすめたりする。

甘い香りは、同様に彼女の香りでもある。

綿桃の香りの中で彼女は生きているからだ。

だが、ここ最近綿桃以外の、少し甘酸っぱいそんな香りが窓から香ってくるのだ。

ポーレーは気になっているのだが、彼女の目はそれを確かめる事が出来ない。

この香りがすると、同様に誰かが窓の外に居るような気配がするのだが、

「そこに誰がいるの？」

と聞いても、返事が返って来た事は無いのだ。

ポーレーにとって、その甘酸っぱい香りは、どこか懐かしくも、

憎らしい香りであった。

紫衣は横笛が苦手である。

香弥に比べると幾分も下手で、特技はいくらあっても損ではない妃

候補にとって、こういった苦手意識は良くないと思っていた。

彼女が笛を吹くと、水のせせらぎを表現する場面で滝の猛々しさしかイメージできなかつたり、春の表現が極寒のようであつたり、なんというか少々ワイルドだ。

彼女はは努力家で練習も欠かさないが、笛ばかりはどれだけやってもなかなか上手くならない。

いつもお世話になっている、音楽家のメルビエル先生は、

「まあ、人には向き不向きがありますから」

と、彼女が上手くなりたいと申し出るのに、少々視線を泳がせていた。これに関しては、先生もお手上げと言つか。

先生の言葉の濁りから、紫衣は肩を小さくする。

しかしメルビエル先生は、何かピンと思いついたように。

「そうだ。今夜私の旧友と共に、音楽会を開くですが、紫衣お嬢様ご覧になっていきませんか？ 昔、共に音楽を学んだ者なのですが、今は旅に出ていて…。その者が最近帰って来たので、ならば久々に、我が家に来るのですよ。知っていますでしょう、吟遊詩人のバルデ・バードです」

「……………まあ」

紫衣は瞳を輝かせた。その名は有名で、生ける伝説とも言われている。

「旅の話なども聞けますよ、興味ありますでしょう？」

メルビエル先生は明暗と言うように人差し指を立て、ウインクをした。

バルデ・バードは、紫衣が思っていたよりずっとずっと素敵な人であつた。

随分昔から、この天上界に貢献している人物である。落ち着きこそ貫禄のある、いかにも大御所の域であるが、見た目は若く、瞳の涼しい男性である。いわゆるレイデン師などに見られる謎の若さである。

アツシユの長い髪を緩く一つに結んでいて、大きな羽のついた帽子をかぶっている。

彼はメルビエル先生の家で、彼自身のギターやオカリナなど、いくつかの楽器を使って楽しそうに演奏し、自分の旅の話をするのだ。

天上界は常に広がり続けている、と彼は言った。

88星座の地域だけではなく、その向こう側にも世界はあると。

ただ、そこまで行こうと言う者はなかなか居ない。

変化を望まないのが天上界の美德で、暗黙のルールであるから、88星座の範囲を超えようとするのだ。

それをあえて目指すのが、吟遊詩人である彼の目的らしい。

見た事も無い世界の話は、客にとっては空想の物語のような魅力が

ある。

我々が触れた事の無い植物や動物、自然の営みがあるらしい。ただ、そこに星守の民は居ないと言う。

バルデの語る話は、真実であれ嘘であれ、人々を楽しませている事に変わりはないのだ。

彼の物語を、更に盛り上げるのが音楽だ。

ギターが語りを邪魔しないで、空気を作る役割である。

異国情緒の旋律は聞き覚えが無いのに懐かしい気がして、心地いい。

これが音楽なのだと、紫衣は一人胸を抑えていた。

音楽会の後の食事会で、メルビエル先生が彼女をバルデに紹介した。紫衣はお得意の優雅な挨拶をして、彼に対しても物怖じしない。流石は妃候補と言ったところだ。

バルデは彼女に挨拶を返し、微笑んだ。

「双子座宮の姫君が私の語りを聞いて下さるとは、光栄です」

「いいえ、とんでもない。感銘を受けましたわ。88星座より向こうの世界など、考えたこともございませんでした。天上界に果ては

あるのでしょうか」

二人は隣同士に座り、最初はお決まりの会話をしていたが、紫衣がバルデの語った88星座の向こう側についてあれこれ良く質問したので、その会話は思いの外盛り上がる。彼女は世界に興味があったのだ。

「……………広がり続ける天上界の、果てを見たものは居ないでしょう。我々には追いつけないようになっていくのです。でも、いつか私は、その果てを見つけないと思っています」

バルデの瞳は、まるで少年の様だった。

彼は世界の果て、と言う未知の世界に魅せられているのだ。そんなところが、また彼の魅力の一つでもある。

「世界の果て……………どうなっているのでしょうか……………。天上界の遥か下には“地上”があると言われていきますけれど、そことは繋がっているのでしょうか」

「……………いえ、地上は鏡越しの世界のようなもの。天上界とは繋がっては居ないでしょう。私は、決して手の届かないところだと思っています。ただ、天上界と地上界は、お互いの存在に支えられていると言っても良いでしょう。絶対に触れ合えないが、お互いが無ければ成り立たないと言う……………不思議な関係です」

「地上の人々は我々の灯す星の光を、毎晩眺めているのでしょうか？ 我々が星の光を守るのは、地上のため、と言うこともありえますでしょうか」

紫衣は溢れる疑問を、いくつもバルドに投げかける。

彼女は控えめのように見えて、好奇心旺盛だ。

「ははあ…紫衣様は本当に、面白い考え方をしますね」

「私、変な事を言いましたか？」

「いいえ、星守の民は、“星の宮”の為に星火を灯すと考えていて、それに疑問すら持ちません。地上のため、という考えを持っている方は珍しい。それ故に、私はとても尊いと思っています。何しろ私もそう思っているからです」

バルデは、机に並べられている葡萄酒やらチーズやら、それ以外にも沢山のごちそうよりもこういった話に花を咲かせるのが好きのようだ。紫衣もまた、同じである。

「……………私、地上に関する本を沢山読みました。地上では我々の灯した光が、毎晩空に、宝石のように輝いていると言うではないですか。それを想像するだけで、何時間でも暇をつぶせますもの。でも、地上に良いイメージを持っている者は、星守の民の中でもごく僅かなようです」

「ははは、それはそうでしょう。地上は死後の世界だと、神話の時代から言われているのですから。落星^{らくせい}という言葉がありますでしょう。聖書の中に出てくる、罪を犯し、星の宮に裁かれ地上に落とされたとされる者の事ですが、これは落生^{らくせい}と同じだと。死ぬと言う事です」

「地上は恐ろしい所でしょうか」

「それは、星の宮にしか分からない事です」

紫衣は少しだけ考えてみた。

死後の世界は、生きる世界と何が違うのかと言う事を。

その世界から居なくなる、と言う事であれば、もし死の世界から再び生の世界へ行く時、死の世界から居なくなるという意味では同じ事ではないかと。

鏡越しで同じ意味を持つのなら、それはまるで、天上界と地上界の様だと。

地上の者たちもまた、死んだら天上界へいくと考えられているのだろうか。

バルデは、こうやって思考を続ける紫衣に、大変満足そうに微笑んだ。

「紫衣様は賢いお人だ。あなたが妃候補の最有力である事に、私は希望を感じますよ」

「……………そ、そうでしょうか」

「ええ、ご自分の身分や環境に満足せず、絶えず考え続ける。良い妃になれるでしょう。笛などが出来なくても、あなたが魅力的に見える長所は、いくらでもあると言っのに」

「…あ…ふふ…」

紫衣は長い袖で、少し恥ずかしそうに口元を隠した。

バルデは机の上の葡萄酒の黒みに、視線を落とす。

何を考えているのだろう。

紫衣はバルデの表情と葡萄酒を何度か見比べ、ふと思いついた事を言葉にした。

「葡萄酒は、世界の果てのようすわね」

「……………」

「真っ黒で何も分からないのに、そこに潜む香りや色身が魅力的で向こう側が知りたくなる……………そう、宇宙ですわ」

「……………紫衣様……………」

バルデはとても驚いた顔をしていた。

長髪の流れる束の隙間から、切れ長の瞳が少し揺れる。

そして、なんだかとても悲しそうな顔をした。

「……………昔、同じ事を言った人が居ます。葡萄酒は、世界の果てだと…。確かに…」

彼は、その先を言わなかった。

葡萄酒のグラスを持って、それを少し揺らしたりして、目に映る黒と紫の光沢を、決して見逃さないで。

彼は何を見ていたのだろう。

10：ボレー・アリエスと紫衣

それは本当にたまたま、紫衣が誰もいない森で笛の練習をしていた時の事だ。

彼女は森の木々の隙間から、向こう側の丘の小道を歩いていくバルデを見つけた。

彼女の視力は3・0だ。
ちなみに香弥も。

「あら、こちら辺に用事があるのかしら」

彼女は小首をかしげる。

ここは牡羊座でも端の方にあたる綿桃の花が沢山生えている森だ。
メルビエル先生の授業が終わると、紫衣はよくここへ来ていた。

彼女の好奇心は、バルデをみすみす見送ったりしない。

彼がなぜ、こんな何も無い場所へ一人で向かっているのか、それを知りたくてたまらない。

彼女は後を追った。

「あの家は、ポレー女史の…」

紫衣は木の後ろから、その家を確認した。バルデが家の傍らに佇んでいる。

だが、何かを言ったり、その家の戸を叩く気配もない。

ただじっと、窓の側に立って、黙って何かを見ている。

「……………！？」

突然、バルデが窓辺に近づき、その出窓の上に、持っていた“何か”を置いた。

流石の紫衣の視力でも、それが何かは分からなかったが。

バルデはそのまま丘を下っていく。

他に何かする事も無く、ただまっすぐに。

彼にしては物悲しそうな、そう、あの音楽会で葡萄酒の話をした時に見せたような顔をして。

「……………バルデさん、どうしたのかしら」

さて、紫衣は迷った。

バルデを追うべきか、彼が何かを残していった、あの家に向かうべきか。

まるで探偵の様だと、紫衣は張り切り、とりあえず丘の上の、レングアの家を確かめようと思った。

バルデの見ていた窓は、驚いた事に開け放たれていた。
心地よい綿桃の香りが良く通れるようにしているのだろう。その窓の向こう側には、ベットに座っている一人の女性が居た。
紫衣はピンと来る。

そうだ、確かポレー女史は盲目だったんだ。

紫衣は出窓に置かれていた小さな紫色の花を確認する。

この天上界では、さほど珍しい花ではないが、葡萄に似た香りがするため“星葡萄草”^{ほしぶどうくさ}と呼ばれている。

「……………そこにだれかいるの？」

突然、盲目のポレーがこちらに声をかけて来た。視線は目の前を向いたままだが、紫衣の気配に気がついたのだろう。

「……………あ、申し訳ございません。覗き見みたいな事をしてしまって……………」

紫衣は頭を下げる。それはポレーには分からない動作であるが、彼女は体が先に動いてしまうから。

「……………まあ、お嬢さんはどなた？」

ポレーは紫衣の声を聞くと、いきなり表情が柔らかくなって、こちらを向いた。見えていないのだが、窓辺に紫衣が居る事は分かっているのだから。

「私は、双子座の紫衣と申します。ポレー女史」

「まあ……………まあまあ、宮姫様ではございませんか。どうしてこのような所へ？ たったお一人で？」

ポレーはとても驚いている。

「あ、いえ、私は兄がいない時は一人で行動していますので……………」

「もしかして、そこに“星葡萄草”を置いていつて下さっているのは、あなた様ですか？」

「……………！？」

紫衣は面食らった。

バルデさんがここへ来た事を、この人は知らないのだ。

「いいえ、ここへこの花を置いていったのは、吟遊詩人のバルデさんですね。私、さっきバルデさんを見ましたから」

「……………え……………」

紫衣がそう言うと、ポレーは一瞬にして表情を変えた。

綿桃の香りと、葡萄の香りが混ざった風が、窓を通り抜けていく。

「……………そう……………あの人が……………」

彼女は眉根を寄せ、とても悲しそうな顔をした。先ほどのバルデのようだ。

「戻って来ていたの……………私の事は、もう、忘れたものだとばかり……………」

「……………ポレーさん？」

「……………」

ポレーは自分の瞳を僅かに抑え、唇をキツく結ぶと、そのベットの
中から出て、窓辺に近づいて来た。動揺していたのか、側にあった
椅子に足を取られて転んでしまう。

「ポレーさん！」

紫衣は慌てて、壁伝いの端にあるドアに向かい、家の中に入った。
床に伏せたままのポレーを抱きかかえるようにして、

「大丈夫ですか？」

「……………ええ、すみません、紫衣様」

彼女をゆっくり起こすと、ベットに向かわせた。
彼女の足が震えている。胸を抑えて、いまだに何か信じられないと
言う顔をしていた。

「私が星葡萄草を持ってきましたから、ポレーさんは無理なさらないで」

「申し訳ございません」

彼女の体はいやに細く、儂い。

白い部屋着がまた、彼女の存在の薄さを強調させている。

彼女は少し咳き込んだ。

「大丈夫ですか？」

紫衣は星葡萄草を持って来て、ポレーの手に握らせた。

そのとき、紫衣がポレーに触れた事で、見えてくるヴィジョンに、彼女は少ししまったと思った。

紫衣は触れた者の記憶を垣間見る事が出来るのだ。
だからふだんからは、人にむやみに触ったり、意識して記憶を見ないようにしているが、今は完全に無防備だった。

むしろ、この人とバルデについて、“知りたい”と思ってしまっていたから。

彼女は、ポレーとバルデの過去を見てしまう。

「どうしても行ってしまうのですか？」

「……………ええ、行かなければ、私が吟遊詩人をしている意味がまるで無くなってしまうからです」

「私を置いていくのですか？」

「……………ええ」

まだ若いポレーとバルデだ。
そこは綿桃の咲く丘の上。

「……………ならば私を連れて行って下さい」

「それは出来ません。ここからはとても危険な、私の旅です」

「そんなの分かっています。私が一番、あなたの話を聞いて来たのですから。でも、言ったでしょう、私は世界の果てを見てみたい…」

「……………」

バルデは小さく拳を握って、ポレーに背を向けたまま彼女を見ようとしない。

綿桃の甘い香りが、二人の沈黙の中揺れている。

「私、待ってますから。あなたが連れて行ってくれるまで」

「この綿桃の丘の上で、ずっと」

バルデが旅立つ次の日、ポレーはこの丘の上で待っていた。その日は冷たい雨が天上界中に降っていたが、彼女は待っていた。ずっとずっと、彼が来るのを待ち続け、翌日も、その次の日も、彼女はその丘の上から動かない。

そしてとうとう、彼はこなかった。

彼女は高熱を出し、意識が戻った頃には視力を失って、それでも綿桃の丘の上から離れられない。

いまでもこうやって、この人里離れた綿桃の丘の上で、ひっそりと暮らしているのだから。

「……………」

紫衣はポレーから手を離れた。

少しの間、意識がポレーの記憶に向いていたせいで、言葉が出ない。

「紫衣様？」

「……………あつ」

紫衣は髪を耳にかけ直し、あたふたと視線を泳がせる。

ポレーには決して見えないだろうが、紫衣は本当に焦った様子だった。

「……………あの、えっと…その星葡萄草は…バルデさんとはいったいどういう……………」

「……………」

「すつ、すいません。失礼ですよね、私…」

「……………ふふっ、いいえ…」

紫衣が突然聞いた質問に、ポレーは意外にも微笑む。
手に持つ星葡萄草の花の香りが微かに鼻をかすめる。

「バルデさんとは、婚約を誓った仲でした。遠い昔の事ですけれど、ちょうど戦争の終わった頃…。そうですね、紫衣さんたちが生まれる前の事です。彼はノーザンクロスで、“あること”を調べなくてはいけなくなつたのです。それはとても長い調査で、次はいつ帰ってくるか分からない、と言う事でした。私は、あの方と共に行きたかったのですけれど……………」

ポレーは肩を竦め、眉根を寄せて微笑む。

「結局、あの人は一人で行ってしまいました」

「……………」

ポレーは見えない瞳で、遙か遠くを見るように。

「彼の旅の話聞いた事がありますか？ 紫衣さん」

「え、ええ。いくつか、前の音楽会で」

「世界の果てのお話は聞いていて？」

「ええ」

紫衣はこくと頷き、そしてハツとした。

ポレーが星葡萄草を持ち、それを見えない瞳で必死に捕えようとする仕草と、先日バルデが葡萄酒を見ていた瞳が、かぶつてみたからだ。

「世界の果ては、葡萄酒のようだ……」

紫衣はそつと呟いた。

ポレーはその言葉に、僅かに反応して、紫衣の方に顔を向ける。

紫衣には分かってしまった。

どんなに時が経っていても、二人を繋ぐものは同じ。

ポレーさんがこの丘を離れられないように、バルデさんも彼女を忘れられないのだ。

どうしてだろう。

せつかく近くにいたのに、二人は巡り会う事が出来ない。

「バルデさんは、ポレーさんに会いに来たんですよ、きっと。だって、この家の窓から、あなたを見てました。じつと……」

でも、語りかける事が出来ない。

ポレーは気づく事ができない。

「……でも、私はもう、あの人を追いかけていく事は出来ない。こんな目では、連れていっても言えない……っ」

「……………」

そうだ。

二人を繋ぐものが葡萄の香りなら、

二人の出会いを妨げるのは、ポレーの瞳。

バルデは、自分のせいで彼女が盲目になったと、自身を責めている。
ポレーはこの瞳のせいで、バルデに会う資格は無いと思っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278y/>

天秤 薬局

2011年11月17日19時06分発行